

令和3年度  
興南中学校  
入学試験問題

前期

国語

令和3年1月9日(土)実施 45分/100点満点

受験上の注意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題用紙は開かないようにして下さい。  
解答用紙は別になっています。
2. 問題は【一】～【三】まで3題あります。
3. 試験時間は45分です。
4. 解答は解答用紙の所定のところに記入して下さい。
5. 解答は楷書で丁寧に記入して下さい。
6. 解答用紙には、受験番号、小学校名、氏名を必ず記入して下さい。
7. 試験終了後、問題用紙は持ち帰って下さい。





【一】 次の各問に答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧かいしよ ていねいに記入せよ。

問一 次の傍線部ぼうせんぶのカタカナを漢字に直し、漢字はひらがなで読みを答えよ。

1 笑顔をカメラにオサめる。      2 人工エイセイを打ち上げる。      3 レストランを営む。  
4 八百屋へ行く。

問二 次の□の中に入る打消しを表す漢字を□から一つずつ選び、熟語を完成させよ。

1 □常識      2 □制限  
非・未・無・不

問三 次の慣用句の意味として最も適当なものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えよ。

1 手をこまねく

ア いい加減に済ませること      イ 考えられる限りの方法を試すこと

ウ 何もせずにそばで見ていること      エ 準備をして待ち構えること

2 目がない

ア まったく相手にしないこと      イ とても好きであること

ウ 非常に忙しいこと      エ することがひどすぎて、見過ごせないこと

3 口が重い

ア おいしくたべること      イ 余計なことをしゃべること

ウ 何度も同じことを繰り返して言うこと      エ あまりしゃべらないこと

問四 次の各文は、漢字辞典を使って「秋」を調べるときの手順である。(1) (3)に当てはまる語句を、(1)はひらがなで、(2)、(3)は漢数字で答えよ。

1 「秋」は部首が「禾」で (1) へん。

2 「禾」は (2) 画なので、部首索引をみて (2) 画の中から「禾」を見つける。

3 「禾」の漢字が載っているページの中から、部首以外の画数 (3) 画から「秋」の字を探す。

問五 ある作品の特徴を書いた次の文章を読み、後の問に答えよ。

鎌倉時代に成立した軍記物語である。平氏と源氏の戦いが描かれており、その根底には仏教の価値観や美学がある。

1 作品名を漢字のみ四字で答えよ。

2 この作品の冒頭を次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 春はあけぼの。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、むらさきだちたる雲のほそくたなびきたる。

イ 今は昔、竹取の翁おきなといふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづの事につかひけり。

ウ 祇園精舎の鐘の聲ね、諸行無常の響なごみきあり。沙羅双樹さらかんじゆの花の色、盛者必衰さかきものかなたの理をあらはす。

エ つれづれなるままに、日暮らし、硯すずりにむかひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、

あやしうこそものぐるほしけれ。

【二】次の文章は、チンパンジーの知性を研究する「アイ・プロジェクト」の内容を紹介した文章の一部である。文章を読んで後の問に答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧に入力せよ。

1 「ヒトの持ち物に興味津々のチンパンジー」について

長いあいだ、アイとともにすごしてきた。基本的にはコンピュータとやりとりする実験のただか、それでもアイとのふれあいはある。そうした時間に、チンパンジーはよくヒトを見ているなあ、ヒトのまねをするなあとカ<sup>a</sup>ン心することがあった。い<sup>b</sup>が強い、というべきなのだろう。とにかくヒトが持っている物に強いカ<sup>b</sup>ン心を示す。まず欲<sup>c</sup>しが<sup>d</sup>る。手にいれる<sup>e</sup>とためつすがめつして、匂いをか<sup>f</sup>い<sup>g</sup>だり、口を近づけたり。手袋とかロープとか手ぬぐいとか新聞紙とか、さ<sup>h</sup>しさわりのないものを与えて遊ばせておいた。

2 i について

アイが八歳になった冬の日のできごとである。勉強時間が終わって、アイを外へ散歩につれだそうと思った。ストーブのスイッチを切り忘れたことに気づいたので、アイの手を離して部屋の隅<sup>i</sup>に行<sup>j</sup>った。すると、アイはコンピュータに近づいて、記憶装置のとめ金<sup>k</sup>をはずして、中<sup>l</sup>のフロッピーディスクを取り出してしまった。

その薄い一枚のディスクには、今終わったばかりの勉強時間の成績記録を含めて、毎日のだいたいな成果が記録されている。ふりむき<sup>m</sup>ざまに<sup>n</sup>このようすを目撃<sup>o</sup>したわたしは、かなり強い調子で、「ダメツ」と言った。アイは、しばらくディスクをためつすがめつしていた。ディスクの挿入<sup>p</sup>方向を確かめていたのかもしれない。やがて正しい方向で、そのディスクをもとのスロットの位置<sup>q</sup>に挿入<sup>r</sup>し、奥まできっちり入れてから、とめ金をカチツとかけた。

フ<sup>s</sup>チにもこんなことがあった。ある日、飼育員の残したホースとデッキブラシを彼女が手にいれてしまった。へー、何を思

ったか、プチはサンルームの床に水をまいてブラシでこすり、そうじをはじめた。彼女にとって、日ごろ見慣れた光景である。きつと一度自分でもやってみたいと思っていたのだろう。

3 ii にっこり

アイやプチのこうした「まね」は、心理学の用語で「延滞模倣<sup>③</sup>」と呼ばれる。「模倣」とは、お手本となる動作を眼の前でやってみせられたとおりに、見ようまねでやってみることだ。お手本を見たとあとなってから、眼の前にはお手本がないのに同じ動作をまねる、それが「延滞模倣」である。

ヒトの子どもが櫛くしを使うようになる発達の過程を想像してみよう。まず、おかあさんが子どもの髪かみをなでつけてあげる。そのうちに、子ども用の櫛くしを用意する。おかあさんはおとな用を使い、子どもは子ども用を使って、二人が向き合って櫛くしを使う。「こんなふうにしてごらん」とおかあさんが言いながら櫛くしを使う。まず子どもは、おかあさんの髪かみに櫛くしをあてにいくだろう。そのうちに、おかあさんを見て自分でも櫛くしをあてるようになる。やがて子どもは、ひとり遊びしているときに、子ども用を取り出してきて、自分で自分の髪かみをなでつける。これが延滞模倣である。

延滞模倣の先に、「ごっこ遊び」がある。櫛くしをもっていない子どもが、ある日、積み木を手にとりて髪かみにあてる。「きれいきれいしてるの」と言いながら、積み木の櫛くしで髪かみをとかしているふりをする。へⅡへ、ヒトの子どもが、小さな四角い積み木を自動車に見立てて、「ブブー、ブブー」と言いながら床の上をすべらせる。

積み木は積み木であって自動車ではない。積み木は積み木であって櫛くしではない。ある物を別の物に見立てて遊ぶのを「ごっこ遊び」という。いわゆる「ままごと」は、ごっこ遊びのよい例だろう。

チンパンジーでも、「ごっこ遊び」と呼べるふるまいをすることがわかっている。アイが五歳になる少し前のことだ。アイがほか

のなかまと運動場で遊んでいた。飼育担当の稲垣順三さんじゅんざうとわたしも彼らといっしょに遊んでいた。ひとしきり遊んでくたびれて草むらに寝ころんでいると、アイがひとり遊びを始めた。

4 iii について

赤いプラスチックのカップで土をすくって、眼の高さに持ちあげる。そしてカップを傾けて、中の土をサラサラとこぼす。<sup>⑤</sup> 下唇くちびるだけをぐっと前に突き出して受け皿のようなかたちにして、流れ落ちる土を受けとめようとする。実際には、もうあと少しという手前で唇をとめているので、土は口の中には入らない。カップの土がなくなると、またすくってはサラサラとこぼす。これを繰り返していた。アイは、土を水に見立てて「水飲みごっこ」をしていたのだ。

野生チンパンジーは、水を飲むときに、直接口をつけて飲むこともあるが、葉をカップやスポンジがわりに使って飲む。アイとペンダーサは、運動場では、カップに水を受けて飲んだりする。カップを眼の高さに持ちあげ、下唇を前に突き出して受け皿のようにしたところへ、カップを傾けて水を流し込む。<sup>⑥</sup> アイの土遊びは、まさにカップの水飲みと同じ格好かっこうをして遊んでいるのだ。実際に眼の前にある「土」を、別の物である「水」に見立て、そうしたイメージの中で、水のつもりとして遊ぶというのは、かなり複雑な作業といえる。

5 「ヒトとの生活で身につく力」について

延滞模倣も、ごっこ遊びも、ヒトの子どもがいわゆる「ことば」を話しはじめるころに現れる。きわめてヒトに特有の行動である。しかしヒトの環境で暮らしているチンパンジーは、特別な訓練を受けたわけではないのに、ヒトの子どもと同様に日常の暮らしの中で、こうした延滞模倣や、いかにもイメージの中で遊んでいるかのようなふるまいをするようになる。

【 松沢哲郎『チンパンジーはちんぱんじん』（岩波書店） ※問題作成の都合上、一部改変 】



【語注】

- \* 1 アイ 著者の研究のパートナーであるチンパンジーの名前
- \* 2 ためつすがめつ 見た目に狂いくるがないかどうか、念入りに調べ見ること
- \* 3 さしさわりのないもの 人に迷惑がかからないもの
- \* 4 フロッピーディスク 持ち運びのできる薄い磁気ディスク（データを記録したもの）のこと  
挿入口（スロット）に入れて使用する
- \* 5 プチ チンパンジーの名前
- \* 6 なでつける 乱れた髪を整えること
- \* 7 ペンデーサ チンパンジーの名前

問一 二重傍線部 a・bと同じ漢字が用いられている文を次のア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

- a ヒトのまねをするなあとカン心することがあった。
  - ア マラソン大会をカン走する。イ 運動会のカン係者。ウ 宿題にカン想画をかく。エ カン接照明を買う。
- b とにかくヒトが持っている物に強いカン心を示す。
  - ア 手を洗うことが習カンだ。イ 電車カン連の雑誌を買う。ウ 新カン線に乗る。エ 将来の夢は外交カンだ。

問二 いにあてはまる言葉として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

- ア 好奇心こうきしん
- イ 闘争心とうそうしん
- ウ 警戒心けいかいしん
- エ 平常心

問三 傍線部①「この」が指し示す内容を文章中から一文で特定し、初めの五字を答えよ。(句読点も含む)

問四 へ I へ ・ へ II へ に当てはまる言葉の組み合わせとして、最も適当なものを次のア～エから選び記号で答えよ。

ア へ I へ つまり へ II へ さて イ へ I へ すると へ II へ また

ウ へ I へ すると へ II へ さて エ へ I へ つまり へ II へ また

問五 傍線部②「やってみみたいと思っていた」とあるが、やってみみたいと思っていたことが実現したときに使うことわざとして、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 能ある鷹は爪を隠す イ 猿も木から落ちる ウ 蟻の思いも天に届く エ 鴨がねぎを背負って来る

問六 傍線部③「延滞模倣」とあるが、「プチ」が行う延滞模倣を文章中から三十字で特定し、はじめの五字を抜き出して答えよ。  
(句読点も含む)

問七 傍線部④「見立てて」と同じ意味で用いられている文として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 店員さんが着物の柄を見立ててくれた。 イ 富士山に見立てて校庭に山を作った。

ウ お医者さんがぜん息だと見立てて薬を処方した。 エ お兄さんが弟のランドセルを見立ててくれた。

問八 傍線部⑤「下唇だけをぐっと前に突き出して受け皿のようなかたちにして、流れ落ちる土を受けとめようとする。」の主語を次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 稲垣順三さん イ わたし ウ 「アイ」 エ 「プチ」

問九 傍線部⑥「アイの土遊び」の行動について筆者はどのように考えているか、適当でないものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア まるでイメージの中で遊んでいるような行動だと考えている。

イ 野生のチンパンジーにはみられない、複雑な行動だと考えている。

ウ 眼の前で見本を見ながらやる行動だと考えている。

エ ままごとのような行動だと考えている。

問十 文章中の①～⑤は意味段落ごとに見出しを付けたものである。i～iiiに入る見出しを次のア～ウから選び、それぞれ記号で答えよ。

① 「ヒトの持ち物に興味津々のチンパンジー」について

②

③

④

⑤ 「ヒトとの生活で身につく力」について

ア 「ごっこ遊びをするチンパンジー」について

イ 「ヒトの行動を真似するチンパンジー」について

ウ 『模倣』から『延滞模倣』、そしてその先への変化の過程』について

【三】次の文章を読んで後の間に答えよ。答えは解答用紙に楷書で丁寧<sup>①</sup>に記入せよ。

次郎は、生後まもなく乳母のお浜（校番として働き、そこに住んでいる）にあずけられた。そこでは、お浜にとてもかわいがられ、大事に育てられた。五歳になってからは、正家（お浜の母であるお民に無理やり正家にもどされたので、お民や兄の恭一（次郎と同じく乳母のお浜に預けられたが、一年あまりで正家に戻された）や弟の俊三たちとなじめず夜も寝つけずにいた。正家にもどされた次の日、「ご飯よ」とお民の声したが、一緒に食事することをこぼんでいた。次郎が茶の間に来ないのを誰も呼びにも来なかったが、食事を終えた恭一と俊三が次郎のところに来た。俊三は次郎をからかい、次郎が俊三をつきとばした。そのあと、次郎は、昨夜の寝不足のせいで、竹藪（たけやぶ）の中で寝転んでしまう。

そこで彼は、涼しい風に吹かれながら、ぐっすり眠った。眼がさめたのは昼過ぎだった。腹がげっそりと減っている。それになによりも喉（のど）が乾いて堪（た）えられないほどだった。

彼は起き上がると、八方に眼を配りながら、座敷（ざしき）の縁（えん）に忍びよった。そして縁板（えんいた）に足のよごれをにじりつけてから、足音を立てないように茶の間の方に行った。

そこには誰もいなかった。もう昼飯がすんだあとらしく、ちゃぶ台の上には薬缶（やかん）とおひつだけが残されていて、蠅（はえ）が五、六匹しかにとまっている。

彼はあたりを見まわしてから、薬缶から口づけに、冷えた渋茶（しぶちや）をがぶがぶと飲んだ。それからおひつのふたをとって、いきなりそのなかに手を突っ込んだ。

「誰だだれい」

② だしぬけに台所からお民の声がきこえた。次郎はびつくりして手を引いたが、その五本の指には飯が一握にぎりつかまっていた。彼はあわててそれを口に押しこみながら、座敷の方に逃げ出そうとした。

しかし、もうそれは遅かった。座敷\*8の敷居をまたぐか、またがないかに、彼は襟首えりくびをお民につかまっていたのである。

③ 「お前は、お前は…」

お民の声は、怒りとも悲しみともつかぬ感情で、ふるえていた。

それから次郎は、ちやぶ台の前に引き据すえられて、ながいことお民と対坐\*9しなければならなかった。

「ここはお前の生まれた家なんだよ」

説教は、彼が昨夜来何度さくやらいも聞かされた言葉で始まった。

「この家はね、こんな田舎に住んでいても、れっきとした土族\*10なんだよ」

これも次郎が聞きあきるほどきいた文句であった。もつとも土族がなんだかは、今だにはつきりしない。

「士族の子ともあるうものが、なんとという情けない真似\*11をするんだよ。…強情で食べないつもりなら、いつそ二日でも三日でも食べないでいたらいいじゃないの。ご飯時には寄りつかないで、竹藪の中に寝たりしているくせに、こつそり忍んできて手づかみで食べるなんて、思っただけでも、このお母さんはぞつとするよ」

次郎は、まだ指先にくつついている飯粒めしつぶを、どう始末していいかわからないで、いと手を動かした。

「それ、その手をご覧、それを見たら、ちつとは自分でも恥ずかしい気がするだろう」

次郎はなんと思ったか、ろと手を動かすのをやめてしまった。

「お前はね……」

と、急にお民の声はやさしくなった。

「ちょうど八月十五夜の月が出る頃に生まれたので、今にきつと恭一よりも俊三よりも偉くなるだろうって、お父さんはじめ、みんなでおっしゃっているんだよ」<sup>⑤</sup>

次郎は、これまでお浜が人の顔さえ見ると、よくそんなことを言っていたのを覚えている。そして彼は、そんな話が出ると、いつも内心得意になっていたが、母の口から今はじめてそれを聞かされて、急にそれがつまらないことのように思われた。同時に、彼は校番のむさ苦しい部屋が、無性に恋しくなってきた。

(偉くならなくてもいい)

そんな感じが、はっきりとではないが、彼の心を支配した。一人ぼっちで、しかも、どちらに向いても突きあたるような気持ちでいるのが、彼にはたまらなく嫌だったのである。

「お浜のところへは、もうどんな事があっても帰さないよ。それもみんなお前に偉くなくてももらいたいと思うからのことだよ。

……このお母さんの心が、お前にわかるかい」

次郎には、もうお浜のところに帰れないということだけがわかった。

彼は今更のように悲しくなって、思わず涙をぼたぼたと膝の上に落とした。飯粒のついた指が、急いでそれを拭いた。

お民は昨夜来はじめて次郎の涙を見て、それを自分の説教の効果だと信じた。そこで、簡単に説教のしめくくりをつけると、すぐ立ち上がって、次郎のために椀と皿と箸を用意した。

次郎の涙は容易にとまらなかった。彼は飯をかき込みながら、しきりに息ずすりした。袖口と手の甲が、涙と鼻汁とで、ぐしょぐ

しよに濡れた。お副食には小魚の煮たのをつけてもらったが、泣きじやくつてうまくむしれなかったので、ちよつと箸をつけたぎりだった。それでも飯だけは四杯かえた。

お民は、その間そばに坐つて、次郎のためによそつてやった。

それはむろん彼女の母としての愛情を示すためであつた。しかし次郎のほうから言うと、それはちつともありがたいことではなかつた。なぜなら、もし、彼女がそばにいなかったら、彼は四杯どころが、五杯でも六杯でも食べたであらうから。

なによりも次郎の心を刺激したのは、恭一と俊三とが手をつないでやってきて、縁側から珍しそうにその場の様子を眺めていたことであつた。

「お前たちは、あつちに行つておいで」

お民は何度も二人をたしなめたが、二人は平気な顔をして、ちつとも動こうとはしなかつた。飯が存分に食べられなかつたのは、一つはそのためでもあつたのである。

飯がすむと、次郎はまたしばらくの間、母の説教をきいた。説教をきいている間に、涙がひとりでに乾いて、彼の心は妙に落ちついてきた。同時に、恭一と俊三とに対する憎悪の念が、冷たく彼の胸の底ににじむのを覚えた。

【 下村湖人 『次郎物語 第一部』(講談社) より一部抜粋 ※問題作成の都合上、一部改変 】

【語注】

\*1 乳母

母に代わつて子に乳をのませ、また養育する女

\*2 校番 学校に住みこんで雑務ざつむをこなしたり見張りみはをしてくれる人

\*3 正家 その人の生まれた家

\*4 茶の間 家族が食事をする部屋

\*5 縁板 えんがわ縁側に張る板

\*6 ちゃぶ台 足のついた低い食卓

\*7 おひつ 炊いた飯をいれる木製の器、かぶせぶたがある

\*8 敷居 門の内外を区切り、また部屋を仕切るために敷く横木のこと

\*9 対坐 向かい合つてすわること

\*10 士族 武士であった家系の者に対し与えられた称号しょうごう

\*11 強情 がんこで自分の考えを変えないこと

\*12 息ずすり 声をおさえて、息を小刻きこみに鼻から吸い込むようにして泣くこと

問一 傍線部①「眼を配り」とあるが、ここでの意味として適当でないものを、次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 注意する      イ 注視する      ウ 意識をむける      エ 気配りをする

問二 傍線部②「だしぬけに」と異なる意味で用いられている文として、最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 彼はだしぬけに質問をした。      イ あの人は私をだしぬけにして先に進んだ。

ウ 彼女はだしぬけに僕の前にあらわれた。      エ 彼はだしぬけに教室から飛び出した。



問三 傍線部③「お前は、お前は…」とあるが、ここでのお民の気持ちとして最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア お民は、りっぱな家から生まれているのに、こっそり忍んでご飯を手づかみで食べた次郎のことを、自分の期待にこたえてくれないと感じ落ち込んでいる。

イ お民は、士族の子として生まれたからには、二、三日食べない強さを次郎に持ってほしかったが、それができなかったことに対して悲しんでいる。

ウ お民は、りっぱな身分の子である次郎が、誰の目も触れずに手づかみでご飯を食べようとしたことに対して、怒りとも悲しみともいえない気持ちでいる。

エ お民は、れっきとした士族の子である次郎が、強情でご飯も食べようとしていないことを心配していたが、みんなに内緒で手づかみで食べようとしたところを目撃したため怒りがこみあげている。

問四 本文中の い、ろ に当てはまる言葉として最も適当なものを次のア～エから選び、それぞれ記号で答えよ。

ア びたり      イ ごしごし      ウ くねくね      エ もじもじ

問五 傍線部④「八月十五夜の月」とあるが、この時に見える月の形の名前を漢字二字で答えよ。

問六 傍線部⑤「おっしゃっている」とあるが、ここに用いられている敬語の種類として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えよ。

ア 尊敬語      イ 美化語      ウ 謙讓語 けんじょうご      エ 丁重語 (謙讓語Ⅱ)      オ 丁寧語

問七 傍線部⑥「彼の心」とあるが、次郎の心情の説明として、(A) (D) に当てはまる語句を、字数条件に注意しながら文章中から抜き出して答えよ。(ただし、Cの二字には人物名を入れること)

乳母であり、自分を大事に育ててくれたお浜に「偉くなる」と言われると (A || 二字) になっていたが、無理やりお浜のもことから自分を引き離れたお民に「偉くなる」と言われると、それが (B || 五字) ことに感じてしまい、(C || 二字) のことが恋しくなり、(D || 十字) と思う心。

問八 傍線部⑦「容易」の対義語を漢字二字で答えよ。

問九 傍線部⑧「涙」とあるが、涙を流していた理由として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 朝から腹がげっそり減っており、やっどご飯を食べることができたから。

イ 乳母のもとへ帰りたいたいと思っていたのに、もう二度と帰れないとわかったから。

ウ 急に正家に戻され母になじめずにいたが、母の説教の意味がわかってきたから。

エ やつとのご飯を食べることができたのに、おかわりが思うようにできなかったから。

問十 この文章でお民はどのような人物として描かれているか。最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 次郎が正家に戻ってきたことを快く思っていないため、意地悪で説教を繰り返す、高圧的な人物。

イ 次郎に士族の子としての自覚をもってほしいと願ひ、説教を繰り返す、次郎にとって理解のある人物。

ウ 次郎が正家に戻ってきたことを喜び、士族の子として立派に育てたいと考え、次郎をひいきする人物。

エ 次郎を士族の子として立派に育てたいと考え、説教を通して子を思う母の心を伝えようとする人物。

問十一 文章の内容として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えよ。

ア 主人公の次郎は乳母のもとで五歳まであずけられていたが、正家に連れ戻され、母や兄弟になじめずにいた。次郎はもう一度乳母のもとに帰りたいたいと思っていたが、それができないと知り、これからは母親や兄弟たちと仲良くしようとして態度を改めていく姿が描かれている。

イ 主人公の次郎は乳母のもとで育てられ、五歳のときにやっと正家に帰ることができたが、最初は正家になじめずにご飯と一緒にすることもできなかった。その中で、兄弟の悪態や母親の説教が嫌になり、乳母のもとに帰りたいたいなげき悲しんでいる姿が描かれている。

ウ 主人公の次郎は乳母のもとで五歳まで育てられ、無理やり正家にもどされたが、そこでなじめずに反抗的な態度をとる。その態度に母親から説教ばかり受け、余計に今の生活が嫌になり、乳母との生活を恋しく思い、正家の人たちに心を開いていない姿が描かれている。

エ 主人公の次郎は乳母のもとで五歳まであずけられていたが、急に正家に戻され、母や兄弟になじめずにいる。一緒にご飯を食べることに抵抗があり、その結果、母親に説教を受け、今の生活から抜けだそうとたくらんでいる姿が描かれている。